中央アジアにおける露清貿易とカザフ草原

野　田　　仁

は　じ　め　に
Ⅰ．西シベリア＝新疆間の露清貿易
Ⅱ．露清貿易の媒介としてのカザフ
Ⅲ．貿易構造の変化とロシアによるカザフ草原の併合
お　わ　り　に

は　じ　め　に

1750年代の清朝によるジュンガリア・カシュガリア平定によって，強勢を誇ったジューンガルの帝国は滅亡し，中央アジアにおけるあらたな勢力範囲が定まった。一方でジューンガル滅亡は，アルタイやカザフ草原を経由して，ロシアと清朝とが接触する契機ともなっていた［野田2007］。

19世紀半ば以降両国の関係が新たな条約により再編されるまで，２つの帝国の間で重要なファクターとなっていたのは貿易の問題であった。言うまでも無く，露清貿易はキャフタ条約（1727年）によって定められたキャフタ貿易が主要な部分を占めており，それについてはすでにさまざまな研究がある(1)。北京での取引に代わって露清間の公式の取引となったキャフタ貿易において，1850年までの年別平均の取引高は500～800万ルーブルを数え［吉田1974：192］(2)，ロ

(1)　ソ連期の研究をまとめたホフロフのほか，吉田金一，森永貴子の業績を挙げておく［Khokhlov 1982；吉田1974；森永2004］。

(2)　対する新疆を経由する露清貿易の規模にかんして，ロシアへの輸出が1840-44年の平均値で174,186銀ルーブル，輸入が156,886銀ルーブル，1845-49年ではそれぞれ188,939銀ルーブル，249,510銀ルーブルという値が示されている［Korsak 1857: 434-435］。

シアからの毛皮（1840年代以降は綿織物が主要な品目になる）や清からの木綿（のちに茶）が取引されていた。

他方，ジューンガル滅亡後，新たに視野に入った中央アジアの文脈では，清朝側の新疆北部とロシア側の西シベリアを結んでいた貿易路に注目できる。この「西方」の露清貿易に関わる基礎的な研究として，漢文史料を整理したクズネツォフや［Kuznetsov 1973］，フレッチャーらの研究がある［Fletcher 1978］。

このような新疆＝西シベリア間の取引に着目することは，中間に位置するカザフ草原に遊牧していたカザフの役割を考察することも意味している(3)。佐口透(4)や林永匡と王熹の研究が示すように，清朝とカザフとの取引，すなわち「哈薩克（カザフ）貿易(5)」は，とくに18世紀後半の状況についての大要が判明している。ただしそれは清朝との営みのみで成り立っていたわけではなく，カザフ=ロシア関係，あるいはさまざまな局面における露清を結ぶカザフの役割との関連の上にあったことを踏まえる必要がある。にもかかわらず，従来の中央アジアの貿易にかんする研究は，多くが19世紀後半を中心にし(6)，19世紀半ばまでの状況について，カザフ遊牧民が果たしていた役割を十分に示してこなかった。

そのため，本稿では中央アジアを経由する露清間の物と人の動きを示すと同時に，中央アジア国際関係史における露清貿易の意義を確かめつつ，それが逆にカザフの立場をどのように規定したのかという問題についても考察したい。新しい史料としては，西シベリア総督府に関わるロシア帝国文書を調査し，これまでに知られてきた文献との対照を行うことにしたい。なお，ロシア史料中の年号は，ユリウス暦（露暦）に基づいて示す。

歴史的背景を整理しておくと，ジューンガル滅亡後，中央アジアが露清関係において議論されるようになった結果，貿易における「キャフタ条約体制」も

(3) ロシアと清朝を結ぶ包括的な貿易ルートの構造については，［Noda 2009］。
(4) 佐口の考察の要点は［佐口1963：314；佐口1966：237］を参照。
(5) 林，王の研究は詳細に乾隆年間のカザフの家畜貿易を示すが，政治的状況との乖離が問題点である［林；王1991］。
(6) カザフ草原を中心に対ロシア，中央アジア，新疆との貿易を記述する［Kasymbaev 1996］や［Aldabek 2001］，また［厲1993］，［米2004］など。ロシアと中央アジアとの貿易を統計から分析したものとしてやや古いが［Rozhkova 1949］があり，シベリアと中央アジア間の取引については［Ziiaev 1983］がある。

変化した。新疆やモンゴル西部との取引をにらみながらキャフタ以外の新しい貿易地（たとえばブフタルマなど）を求めていたロシアは，北京に滞在する正教伝道団を通じて清朝との交渉を積極的に持とうとし，西シベリア経由の両国間取引を目指していた(7)。

対する清朝が，ロシアとの貿易はキャフタでのみ認める態度を崩さず，新疆において哈薩克（カザフ）人と「安集延（アンデイジヤン）人」（コーカンド治下のフェルガナ地方出身者，またタシュケント出身者も指す）にのみ取引を認めていたことは広く知られている。それは，以下に考察するように，かえって非公式の取引――正確な取引高の算出は困難だが――が成立する余地を生んだとも言え，そこに西シベリアと新疆を結ぶ露清貿易の起源はあった。また，中央アジアはキャフタ条約の規定の外にあり，双方のより現実的な対応が必要であったことも重要な点である(8)。

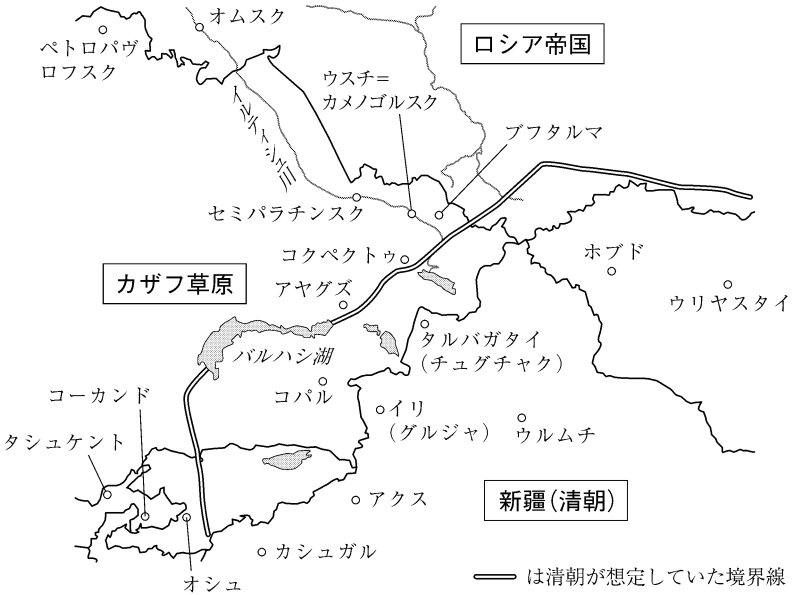
Ⅰ．西シベリア＝新疆間の露清貿易

西シベリア＝清朝西北間には大別して４つのルートが成立していた。すなわち，①アルタイ（ウリャンハイ）経由②ブフタルマ＝ホブド（科布多）・タルバガタイ（塔爾巴哈台）間の路③カザフ草原経由④コーカンド=ハン国（時にブハラも）経由の４通りである。新疆における南北（カシュガリアとジュンガリア）の違いは大きかったため，本稿では，カザフが大きく関与していた新疆北部（②・③）に焦点を当てて以下の考察を進めたい。

１．ロシアの方針

ロシアでは，基本的に外国の隊商の往来を認めていた［Krasovskii 1868: 214-215］。西シベリアにおいても，1757～60年にはすでに清朝の商人がセミパラチンスクに来ていたという。他方，ロシア国内からの隊商の派遣を認め，キャフ

(7)　［Aldabek 2001: 62-65］。とくに，1805年のゴローフキン使節がよく知られる。
(8)　19世紀前半における両国間の現地での交渉は［Noda 2009］で検討している。またイリではクルグズ（布魯特）も貿易を認められていた［伊江集載：122］。クルグズの貿易を分析した［DiCosmo 2003］はカザフとの相違を強調したが，これはさらなる検討を要する問題である。



地図：西シベリアと新疆（国境は現代のもの）

タ以外での清朝との取引に積極的に関わろうとしていた。この動きは最終的に，露清間の新しい通商条約（1851年）へつながっていく。ロシアの積極策の理由としては，新疆経由の距離の近さも考えられる（セミパラチンスク＝タルバガタイ間は約400kmにすぎない）。

ロシアが取った具体的な施策には，まず旅券交付による外国との取引の許可がある。たとえば，西シベリア総督発行の旅券（pashport）は，セミパラチンスク第１ギルド商人の代理人であるタラの「ブハラ人」らが，商業のためにイリ（伊犂）へ向けて，６ヶ月の期間で出国することを証明するものだった。旅券の後半部は，「［ロシア］皇帝陛下の臣民たるカザフのスルタン［カザフ=ハン家の一族］・ビイ・長老たちに，商人の自由な通行を許すよう求める」という内容のほぼ定型の文言となっている(9)。旅券がロシア文・テュルク文併記で作成

(9) 1823年，第１ギルド商人ポポフからオムスク国境委員会宛て申請書［GAOmO: f.3, op.1, d.215, l.18］。後半部のテュルク文の例としては，「偉大なる皇帝陛下の臣たる者の責として，自由に通行させるように（ol uluġ aʻẓam ʼīmpīrāṭur ḥażrātlarïġa

されていたのは，次章で考察するカザフの略奪への対策でもあったと考えてよい。ここに登場する「代理人 *prikazchik*」のシステム[10]も，西シベリアから新疆への隊商を後押ししていた。ギルド商人の名代として，タタール人[11]，シベリア=ブハラ人[12]などのロシア籍ムスリムが新疆，中央アジアへ赴いていたのであり［Nebol'sin 1855: 19-20］，ロシア人は間接的に貿易に従事することが可能であった。このようにムスリム商人が新疆で商業活動を行い得たしくみについても，次章で詳細を論じることとしたい。

その一方で，18世紀後半において，ロシアにとっての「外国」籍商人も，ロシア国内取引用「旅券」（第2ギルド商人と同等の権利を付与する）を20ルーブル支払うことで獲得し，シベリア要塞線の各都市とニジニ=ノヴゴロド定期市で取引することができたという［Apollova 1976: 345］。1834年までに，西シベリアを訪れる外国籍商人――ロシア史料でタシュケント人，ブハラ人と呼ばれる――の辺境における卸売業への従事は，規則によって公式に認められ［TsGARK: f.806, op.1, d.7, l.105; GAOmO: f.3, op.1, d.1365, l.10］，ロシア籍，非ロシア籍にかかわらず多くのムスリム商人がこの地域の貿易に携わっていた。ロシアはたんに外来の商人を優遇するだけではなく，彼らがもたらした新疆からの品に関税を課していた。西シベリアでは，キャフタでロシア商人に対し内密に課していたものと同様の「キャフタ税率 *tarif*」（1800年～）と，1818年に定められた「アジア税率[13]」を併用していた。

最後に，隊商の安全保護である。新疆へ向かう隊商の護衛のために，ロシアのコサック部隊を派遣することがあったが，これはオレンブルグ要塞線でのブ

---

tāba' olunġan vacbīyātï buyunča boš yol bersünlär…)」とある［TsGARK: f.338, op.1, d.585, l.12］。

⑽　1807年敕令による，出境旅券発行の緩和が代理人による商業活動を推進した［Krasovskii 1868: 217］。

⑾　その西シベリア＝新疆間の活動の例は［Frank 2003］を参照。

⑿　彼らのエスニシティーについては［Ziiaev 1969］。タラやトボリスク出身者が多かった。

⒀　［Krasovskii 1868: 248］は，以後ロシアから中央アジアへの輸出が容易になったことを指摘する。

ハラへの隊商の護送に共通する政策である[14]。1829年の事例では，セミパラチンスクの商人の要請を受けて，同地からタルバガタイへの隊商護衛のために30人のコサック部隊およびコサック少尉を派遣した[15]。このようなロシアの軍隊による護衛の例は，西シベリアにおいては，1839年ころまで続いていた［Liubimov1: 326］。

このように，ロシアの視点から見れば，国内外のムスリム商人が西シベリアと新疆をつなぐ通商の形態が成立していたことが理解されるだろう。西シベリアにもたらされた商品は，銀（すなわち元宝銀），中国産木綿織物（biaz'），中国産藍色布（daba），カザフ草原からの家畜であった［TsGARK: f.806, op.1, d.162, ll. 1-8］。

2．新疆と西モンゴルにおける清朝の方針

新疆においては，清朝はロシアの貿易を許さず，カザフ人と「アンディジャン人[16]」にのみ入境を許可していた。それは，新疆における境界が閉じていないことを意味しており，さまざまな抜け道により，禁じられていたロシア商品も新疆に入って来ていた。その理由として，清朝の官員が私的に関税を徴収しようとしていたことも考えられる[17]。ロシア国籍商人の入境についても，1845年の時点で，清朝の駐タルバガタイ高官（amban，おそらく參贊大臣）がそのことに自覚的であったことはよく知られている［Liubimov1: 316］。より早い例は，1829年に清のホブドの大臣がロシア側に伝えた認識で，「ロシア人による清朝領内での貿易は，露清間の条約に反している」にもかかわらず，「ロシア人はタルバガタイやホブドによく来て清朝人と商いをしている」ことを大臣は知っ

---

⑭　1824年，外相ネッセルローデがオレンブルグ軍務知事に宛てて，カザフやヒヴァの略奪から守るために護衛が必要であるとの認識を示した［VPR13: 411-412］。

⑮　1830年，シベリア税関区長官から財務大臣への報告［TsGARK: f.806, op.1, d.38, l.6ob.］。

⑯　アンディジャン人に清側が旅券を発行する規定があったことを指摘している［佐口1963：366］。

⑰　リュビーモフ（註⑳を参照）の聞き取りによると，1842年以来，タタール人率いるカザフからの隊商より非公式に関税を徴収するようになっていた（リュビーモフ自身は，清の官員の懐に入る可能性を示唆した）［Liubimov2: 290, 303］。

ていた[18]。新疆におけるロシア商品の必要性については，1828年において清の官員自らが否定していたが[19]，1845年に新疆北部へ潜入したロシア外務省アジア局副局長のリュビーモフ[20]は，当地でロシア商品の需要があることを報告している［Aldabek 2001: 87］。清朝側としては，ロシア貨物の輸入をたびたび禁止していたが，実際は，ロシア商品は流入していたのだった。

清朝の貿易管理において，大きな役割を果たしていたのは，辺境の哨所として設置されていたカルン（卡倫）であった。ここでは身元確認，商品のチェック，差し押さえなどが行われ，国境の防備あるいは清朝と異民族の関係がここにも投影されていたものと考えられる[21]。清朝籍のムスリム商人が出国することは，近隣のクルグズの牧地に限られており[22]，遠隔地へ赴くことは原則として禁じられていたようである［Kuznetsov 1973: 20, 111］。それでも，例外的に，ニジニ=ノヴゴロドを訪れた漢人商人の存在が知られ［Fletcher 1978: 328］，また，清朝の通訳官が，貿易のためイルビートに行くことをロシアの官員に対して願い出た事例がある[23]。本稿では詳しく触れないが，清朝領内からも商人が私的な取引のためにブフタルマ方面へ赴く例もあったことは興味深い［Kasymbaev 1996: 48, 52］。

---

⑱　ブフタルマ税関からシベリア税関区長官への報告［TsGARK: f.341, op.2, d.26, ll.10-15］。

⑲　より大きな関心はアジア（すなわち中央アジアの）商品にある，と伝えていた（シベリア税関区長官宛て報告）［TsGARK: f.806, op.1, d.13, l.110］。

⑳　その報告が，ロシア商業の新疆への進出に貢献したことは，ソ連期の研究がすでに注目し，近年でも［米2005］などが考察する。外務省に提出された報告書［Liubimov1］は，1908年に公刊された。［Liubimov2］はその基となった手稿で，個人的な主張の少ない現地での記録により近い形であり，２つの版はともに参照する必要がある。彼の経歴については［Ipatova 1993］を参照。

㉑　［野田2005：047］。カルンについての総合的研究として［宝音朝克図2005］がある。カルンの役割について［Korsak 1857: 422］によれば，「ここで，人員と馬の数が数えられ，ヤルリク（旅券の類）に記入され，それは隊商の長に手渡される。この書き付けによって隊商は先へ進むのである」という。

㉒　乾隆59年11月乙酉，回民出卡貿易章程（カシュガル參贊大臣の永保らの奏）［高宗：巻1464］。

㉓　1827年，財務省対外貿易部からシベリア税関区長官宛て［TsGARK: f.806, op.1, d.13, l.36］。この中で「清朝人が来る時は，手厚く受け入れる」ように命じており，来る者は拒まないロシア側の姿勢が表れている。

貿易に対する規制として，茶，大黄，アヘンなどの統制品，禁制品の存在がある。しかし現実には，上述のロシア商品と同様に，清朝の西北辺境はこれらの品が取引される場となっていた。その詳細を以下に見てみよう。

茶については，イリにおいて，カザフの隊商にまぎれて出国し，茶を密輸出しようとするアンディジャン人には規制が加えられたという事例があり[24]，様々な形で国外に流出していたことがわかる。ロシアにもたらされた量について1836年以降の統計資料があり，1840年には白毫茶・磚茶併せて1,800プード（1プード＝16.38kg）近くが中央アジアを経由して輸入された。1849年には，白毫茶5,160プード，磚茶8,528プードに達したのである［Korsak 1857: 440］。

大黄は，1822年，キャフタ税関以外でのロシア領内への輸入が禁止され［シチェグロフ1943：550］，新疆北部でも禁止されていた［清代外交史料道光朝 巻2：39］。しかし実際は，1820年ころの新疆からの出荷の事実が報告されている［Meiendorf 1975: 129］。

アヘンについては，1834年からセミパラチンスク経由で清朝西北へもたらされるようになったという指摘がある［Krasovskii 1868: 258］。ロシアでは，1841年に輸出禁止令が出され［シチェグロフ1943：629］，翌年には露清政府間でもアヘン禁輸についての交渉が行われた[25]。にもかかわらずアヘンの場合も，取引の多くの実例を史料中に見出すことができる[26]。その後も新疆への流入は続き，1845年前後に，イルビートから新疆北部へアヘンが運ばれた例がある［Liubimov2: 292, 302］。1846年の例では，トロイツク，セミパラチンスクから運ばれた200プードのアヘンを，タルバガタイにおいて3,600ルーブル（10元宝銀）で取引したという[27]。

---

(24) 道光8年7月（丙寅），徳英阿奏［回疆剿擒逆匪方略 巻68：5-6］（［佐口1963：372］も参照）。

(25) 露暦5月1日，ロシア元老院は清朝理藩院に宛てて，ロシアからのアヘン販売を禁止する旨を伝えた［俄文：360］。

(26) 1840年前後のアヘン取引は［Konshin 1905: 16］，1842年の例は，アヤグズ管区庁よりシベリア=キルギズ辺境庁宛て報告［TsGARK: f.374, op.1, d.39, l.1］。

(27) ［Ianushkevich 2006: 190］。ここから元宝をルーブルに換算すると，1元宝（50両）が360紙幣ルーブルで取引されていたことになる（［Liubimov2: 300］によれば，ロシア内地においては375紙幣ルーブルで交換されていた）。3.5紙幣ルーブル

元宝銀も，規制の裏で清朝国外へ流出していた。その実態について，西シベリアの各税関の統計資料が物語っている。1827年の統計では，セミパラチンスク税関への輸入額（タルバガタイもしくはカザフ草原より）計866,146ルーブルに対し，銀（すなわち元宝銀）が623,637ルーブルを占めていた。同年のブフタルマ税関への輸入額（ナルン川，カザフ草原，ヤルカンド，タルバガタイより）は，88,192ルーブルの総計に対し，銀が60,394ルーブルであり，オムスクにも元宝が24,500ルーブル分（7プード）入っていた［TsGARK: f.806, op.1, d.15, ll.3-57］。また，1843年のセミパラチンスク税関への輸入品の統計によれば，清朝からの228,848銀ルーブルに対し，内84,648銀ルーブル（75プード31フント）は元宝によっていた[28]。新疆でロシア商品が銀によって購入されたのは，1830年代までだったとする指摘もあるが［Fletcher 1978: 328］，清朝側での銀による決済は引き続き行われていたと考えられる［Korsak 1857: 417］。カザフとの取引について検討してみても，清朝は公けにはバーター取引しか認めていなかったが，実際はカザフをも経由して元宝はシベリアに流れていったのである。

すでに指摘されるように，新疆における取引は清朝の官営貿易的性格を持っていた［佐口1963：313-314］。すなわちこれは管理貿易であったが，上に見たように，政府による規制は実効性に乏しく，キャフタ条約の適用外であったこの地域の国際商業には，多くの抜け道があったことに目を向けねばなるまい。

清朝は，新疆における貿易についてロシアに比べてはるかに内向きの政策を取っており，それには，駐屯軍に必要なものを得ることが第一義的な目的であったことと，辺境の防備を念頭においていたことが影響していたと考えられる[29]。このような露清の政策の違いは，両国の対中央アジア政策とも共鳴し，その後のカザフ草原をめぐる両国の態度にも大きく関わることになるが，その点については，第Ⅲ章で再度確認したい。

（assignatsiia）が，1840年以降用いられるようになった1銀ルーブルに相当する。

(28) ［TsGARK: f.806, op.1, d.162, ll.1-8］。［Korsak 1857: 417］も参照。

(29) たとえば官兵の食料となる羊が不足していれば，カザフより購買することになっていた［伊江集載：115］。

Ⅱ．露清貿易の媒介としてのカザフ

1．カザフと露清両国との取引

本章では，ここまでに見た露清の政策を背景として，この地域における貿易の中でカザフが果たしていた役割を考察する。露清両帝国とカザフ間の取引については――とくに清との貿易について――すでに判明している所も多い。それらにより，カザフにとっての貿易の性格が，必需品を得るための交換であったことは示されている。そこで，以下では経済上の側面のみを議論するのではなく，貿易への関与によって両国との関係を有していたカザフの存在の意義を考察することにも重点を置くこととしたい。

佐口透が整理したように，カザフはロシアのイルティシュ要塞線（イルティシュ川沿岸諸都市を結ぶ）および新疆において貿易に携わっていた［佐口1966：238］。先に取引がはじまったのは，ロシア辺境においてである。18世紀後半までのカザフとロシアの取引についてはアポローワの研究がある。西方のオレンブルグ要塞線[30]に次いで，ジューンガルの勢力が衰えた1750年代以降，イルティシュ線においても，家畜とロシア製品を交換する形でロシアとの貿易が始まった［Apollova 1976: 322］。とくに1764年に設置されたセミパラチンスクの取引場（menovoi dvor）がよく知られており［Andreev 1998: 40］，ここでは，中央アジア，とくにブハラからの商品ともカザフは家畜を交換していたという［Apollova 1976: 323］。

カザフがもたらす家畜の価値については，オレンブルグに関わる記述だが，「国家の取引にとって重要で意味のある品目である」とみなされ，ロシア製品との交換はロシアにとっても利益になると認識されていた[31]。1822年以降，中ジュズ（カザフの部族連合である３ジュズの１つ）の遊牧地がロシアの西シベリア総督府に組み込まれる過程で，ロシアとの結びつきはより大きいものとなる。

---

(30) 1747年勅令は外国人への無関税を定めたが，東方のカザフには不便であった［Apollova 1976: 320］。

(31) 1810年，財相のための覚書［VPR5: 617］。

1824年の例では，ペトロパヴロフスクにおけるカザフの家畜の購入価格は，羊が４ルーブル，馬は200ないし300ルーブルとなっていた[32]。家畜以外にカザフが取引をしていたのは，狐・テン・狼等の毛皮であり，ロシアからは綿ビロード・なめし革・穀類・小麦などを得ている[33]。

他方，カザフが清との貿易を開始するのは，公式の関係が始まった直後の1758（乾隆23）年からである。清朝皇帝に最初に使者を派遣したカザフのアブライ（のちハンに即位）は，「自らの馬群を率い，自分たちに無い物を交換して得れば，甚だ益となる」との見解を示し，清朝側でも，屯田と関連して「カザフとの貿易を，甚だ有益となす」という上奏があり，双方に利があることが確認された[34]。貿易はまずウルムチで開始された（1765年まで）。カザフがロシアに対して清との関係を説明する際に，貿易が目的であることを一つの口実にしており，カザフにとっての貿易の重要性は明白であった［野田2005：034］。清朝側でも，軍馬あるいは食用としての家畜を必要としており，カザフへの対価として布や茶などを用意できるという状況があった。

カザフが家畜と交換する物品については，林永匡と王熹が軍機処満文月摺檔からさらに詳細を明らかにしたが，絹織物として，取引量順に緞子，繻子，綸子，薄絹（紗）があった［林；王1991：458］。のちにカザフとの主要な交換品となった回布（新疆南部産の綿布）は，１疋４銭で，タルバガタイの定例にしたがえば，馬10頭が回布30-50疋，牛10頭が20-40疋，羊100頭が75-80疋で取引され［塔爾巴哈台事宜 巻４：７］，その代価となる回布の量は99,000余疋と定まっていた[35]。

イリの規定にあるように，兵民の「私的な交換」は禁止され，清朝が得た家畜は官庫に入った［伊江彙覧：76-77］。つまり，清朝側の商人との直接取引は認

---

(32) 1824年，オムスク州長官宛て報告の添附文書［TsGARK: f.338, op.1, d.351, ll.5-6］。

(33) 1828年のブフタルマ税関の統計［Kasymbaev 1990; 28］。

(34) 乾隆22年９月14日（10月７日硃批），兆惠（ジャオイ），富德（フデ）奏［満文録副：1671-016/47-1391］，および10月７日（丙寅），ジャオフイ，フデ奏［高宗：巻548］。

(35) 回布に加えて，綢緞も毎年内地より740疋が集められ，カザフとの交換に用いられていた［伊江集載：111］。［佐口1963：365］も参照。

められていなかった。

以上は，公式な清朝との取引，いわゆる官貿易であったが，私貿易も見られた［林；王1991：541］。また，カザフの隊商が，狐革などのロシア商品を新疆へもたらすことがあった。たとえば，乾隆33（1768）年の事例では，清朝側は，キャフタにおける貿易が停止中であるためロシア商品を受け入れることはできるが，本来はロシア人が新疆へ品を運んでくることもカザフが中継することも禁止とする方針をあらためて確認している[36]。乾隆53（1788）年にアンディジャン人がセミパラチンスクからロシア貨物を密輸していることが報告された時[37]，その後の保寧（ボーニン）の奏に引用された上諭においては，

> アンディジャン，布魯特（クルグズ），カザフはみな外藩の人で，彼らは卡倫外からロシアに行き貿易をするが，我らは［それに］干渉しない[38]。［以下，傍点は筆者による］

とあり，カザフを含む中央アジアの諸集団がロシアで貿易することには構わなかった。しかし，上諭は続けて，彼らがロシアに行って交換した品をイリなどで売った場合に，「汝らが持つロシアの商品を，わが国の人間に売ることは許さない」，とはっきり告知するよう伊犂将軍ボーニンに命じており，清朝政府がロシア商品の輸入を厳禁していたことは明らかである。しかしながら，先述のように，清朝が規制する品は新疆に入っていた。

私貿易，あるいは上記のような規定にそぐわない非公式の貿易の証左となるものに，元宝銀のカザフ草原における流通がある。これは，カザフがロシアに納めるヤサク（毛皮などで納める現物税）を，家畜現物ではなく，元宝（iambu）で代納することの許可を求める請願があったことから裏付けられる[39]。ロシア当局が状況を調査した結果，「スルタンや地位の高い *pochetnye* カザフの間には，元宝は間違いなくある」という報告が寄せられた[40]。これらの元宝はロシア市

---

(36) 8月13日，伊勒図（イレト）の奏文［中蘇貿易史資料：193-194］。
(37) 10月20日，ボーニン奏［中蘇貿易史資料：194］。
(38) 乾隆54年1月9日硃批［中蘇貿易史資料：194-195］（引用は，所載の満文月摺檔漢訳による）。
(39) 1843年，シベリア=キルギズ辺境庁の報告［GAOmO: f.3, op.12, d.17723, l.1］。
(40) 1851年，西シベリア総局会議議事録［GAOmO: f.3, op.12, d.17723, l.15］。

場にももたらされており，またカザフが直接清朝の商品をロシア側へ持ち込んだ例も見られる[41]。こうして，ロシア商品を新疆に持ち込む，あるいは清朝の品をロシアに売るという形で，カザフがロシアのイルティシュ要塞線と中国新疆間を「中継」する商業に従事していたこともたしかである。ただし，ロシア統計資料の区分がおおまかなため，その具体的な取引高について明らかにすることは難しい。

それ以外のカザフの役割を考えてみると，隊商が清朝のカルンにおいて取調べを受けたことに注目できる。イリやタルバガタイを訪れるカザフの隊商は，それぞれの部族を統率するスルタンが派遣したもので［林；王1991］，スルタンからの書き付けによって身元を保証され，カルンを越えることができた［野田2005：046-047］。このように，カザフの隊商がスルタンからの証明を必要としたことは，次に示す仲介者としてのカザフの役割と大きく関係している。

2．カザフの仲介

1805年に当時のシベリア知事に寄せられた報告は，以下のように，西シベリアと新疆間の貿易を概観している。

> ただカザフのみが国境を越えることを許されているので，［中国の］西部辺境都市における清朝人との貿易は，カザフのスルタンたちを通じて行われている。それゆえ，ロシア商人 *rossiiskoe kupechestvo* は，スルタンらの好意を高い価格で購わざるを得ないのである[42]。

「アンディジャン人」とカザフのみが新疆での貿易を許されていたため，新疆での取引の希望を持っていた「ロシア商人」――ロシア人商人，ムスリム商人も含めロシア臣籍を持つ商人たち――は，彼らの仲介に拠らざるを得なかったことを，この報告は明示している。前章で見たように，清朝の産品に関心を

---

(41) 1825年，対外貿易部からセミパラチンスク税関宛て［TsGARK: f.478, op.2, d. 109, l.3］。「カザフ草原からカザフによって持ち込まれる清の品が，真に清朝のものであればキャフタ税率を，そうでなければアジア税率をかけるよう」指示を行った。

(42) 1805年，シベリア要塞線査閲監ラヴロフからシベリア知事セリフォントフ宛て［RKOXIX: 204］。

寄せるロシアから国内外のムスリムを新疆に派遣するという，一方通行的な貿易の形態があったわけだが，少なくとも19世紀初頭までは，カザフの仲介に頼る必要があったことがここに示されている(43)。また，上の報告が続けて述べたように，カザフの仲介はロシア商人にとって益の薄いものとみなされていたことにも注意すべきである［RKOXIX: 204］。

もちろん，ロシア商人は，カザフからのみ仲介を受けたのではなく，「アンディジャン人」からも名を借りることがあった。ウスチ=カメノゴルスクやセミパラチンスクからイリなどに向かうロシア籍のタタール人らについて，「いつでもタシュケントないしカザフの商人の名前で *pod nazvaniem*」新疆に入ると報告されている(44)。ロシア臣民の清朝領内への通行はそのままでは許されないことはよく知られていたが，「アジア人の装い」――中央アジアのムスリムの振り――をすることにより通行が認められるという認識を同時代の史料に見出せる。

1807年にセミパラチンスクからイリに赴いたタタール人のムルタザー=フェイズッディンの記録は，「誰も個人とは取引をする権利を持たず，将軍と役人 *galadai* がキャラバンサライに来て，金銭を払うのではなく，品物ですべての品を商う。彼らはここで関税も徴収する…［中略］…清朝人は外国人の中でただアンディジャン人のみをイリへ容れている。ただしアンディジャン人の格好によって，そこへは様々な人々が往来している」と記し，フェルガナやタシュケント地方出身の商人（以下，「コーカンド系商人」と記す）による仲介を示した［Nebol'sin 1855: 340-343］。またこのような方法でロシアから来た商人たちが，バーター取引で手に入れた木綿織物は，ロシアに戻った時に売却するか，カザフに売るためのものだったと言うので［Nebol'sin 1855: 343］，カザフもまたロシア商人を介して清朝の品を手にすることがあったことを意味している。

おそらくリュビーモフがもたらした情報（1845年）によって，先行研究では，たんに「アジア人の服装」でロシア籍商人たちが新疆に潜入するとされてき

(43) ロシア財相がその意見（1824年）において，仲介を容認している［Kasymbaev 1990: 40］。

(44) 鉱山主任ポスペロフの報告（1805年）［RKOXIX: 860］。

た[45]。しかし，以下の考察が示すように，貿易の背後にあったカザフの略奪と仲介，またコーカンド系商人の勢力の推移を念頭に置かねば，ロシア籍商人が新疆に入ることが出来た理由を説明できないと筆者は考える。また「アジア人の服装」には，カザフの装いも含まれていた。すでに検討したホブドの大臣の認識（1828年）は，清朝領内で商いを行うロシア人は，「カザフの扮装をすることでのみ入ることができている」とみなしていた［TsGARK: f.341, op.2, d.26, ll. 10-15］。茶の持ち出しを制限されたアンディジャン人がカザフにまぎれてカルンを抜け出す例（1828年）も知られているので［回疆剿擒逆匪方略 巻68：5-6］，清側では，両者の外見を大きく区別できなかった可能性が高い。事実，彼らの衣装について『皇清職貢図[46]』などから知ることができる清朝側のイメージでは，両者の間に大きな違いはない。他方，タタール人などのロシア=ムスリムの装束はロシア人の影響を強く受け，中央アジアのムスリムのそれとは異なるものだったと考えられる。また，ロシア側では，こうした扮装は「うわべだけの儀礼 *naruzhnoe prilichie*」であると認識していたことも指摘しておきたい[47]。

このようにして，カザフの仲介，もしくは変装による潜入の形でロシアのイルティシュ川沿岸都市から清朝の新疆各都市へ隊商が送られ，取引が試みられた[48]。大規模な例として知られるのは，1811年にセミパラチンスクからアクスへ向かった隊商である[49]。1815年から27年までのセミパラチンスク税関における対新疆の取引高は，新疆への輸出が7～12万ルーブル，新疆からは14～26万ルーブルとなっており，ロシアの入超であった［Aldabek 2001: 61］。

さらに，コーカンド系商人になりすまし，かつカザフの仲介を受けるという

---

(45) ［Rozhkova 1949: 337; Kuznetsov 1973: 112］など。本稿では，彼らの潜入方法にさらに幾つかのパターンがあったことを示している。

(46) 乾隆年間に敕命により編纂された絵図で，早稲田大学図書館所蔵本が「古典籍総合データベース」上で公開されている。

(47) 1832年，財相への報告［TsGARK: f.806, op.1, d.48, ll.93-93ob.］。

(48) ［Kasymbaev 1990: 40-41］もカザフの仲介の事実を指摘しているが，清朝側の事情は考慮されていない。

(49) 1811年，シベリア知事グラゼナプから外相ルミャンツェフ宛て［VPR6: 160］。キャフタ条約により，新疆でのロシア人の貿易は禁止され，「アジア人」にのみ許されていることにも言及がある。

複合型の潜入も見られた。1825年に大ジュズの牧地に派遣されたシュビンに同行した医務官ジッベルシュテインは次のような記録を残している。

> 我々［ロシア］の商人は，…［中略］…アンディジャン人の偽りの名前を借りた。このような改竄は，カザフのスルタンたちによって可能になるのだが，彼らは手紙によって隊商の所属がこの領域［タシュケント］にあることを証明した…［中略］…商人は，スルタンらからの手紙を受け取り，その要求にしたがって税を納め，貢物 *tartu*[50] を将軍へ支払うことを引き受けるのであった［Zibbershtein 1936: 254］。

この場合，タシュケントの商人に成りすましたロシア商人は，その偽りの身元をカザフのスルタンに証明してもらい，その代償として，金銭を支払うとともに，代わって清朝高官へ貢馬を納めたのである。同時代の旅行記によれば，「［ロシアの］商人たちは，贈物によって有力なスルタンから清朝の都市の長に宛てた書き付けを得て，庇護者であるスルタンの所有物としてのみ，ロシアの隊商は［清朝領内に］入ることを許された」のであった[51]。このように，カザフの名義で清朝領に赴くためには，別の出費が必要となったことが明らかになっている。それでも，カルンで捕縛されたロシア商人の身元を，スルタンが証明した事例も見られるので[52]，スルタンの仲介の必要性は高く，そもそもカザフの略奪からの保護も目的の一つであった。

このようにして，カザフの仲介を受けて新疆へ入れるようになったロシア商人の存在が明らかになる。カザフの隊商の長は，清朝ではアカラクチ（モンゴル語で「長」を意味する）と呼ばれていたようだが，ロシア人がこのアカラクチとなる場合もあった［野田2005：048］。それは，まさにスルタンたちの保証の下に成立していたのだった[53]。

---

(50) 「贈物」を意味するテュルク語。おもに馬を伊犂将軍やタルバガタイ參贊大臣に贈っていた。

(51) ［Zhivopisnoe: 169］。著者不明だが，1825-26年のシベリア・アルタイ旅行の記録である。

(52) 1830年，ウスチ=カメノゴルスク税関からシベリア税関区長官宛て報告［TsGARK: f.806, op.1, d.13, l.197］。

(53) 1830年の記録が，カザフのスルタンから書き付けを受け取り隊商の長となったアカラクチの存在を示す［Aldabek 2001: 47］。

3．隊商の略奪

西シベリアから新疆へ向かう隊商にとって，カザフは上のような中継・仲介者であるのみならず，障害でもあった。その理由は，清朝の領域へ赴くためには，カザフの遊牧地を通過せざるを得なかったことにある。ここで言うカザフの略奪とは，カザフ自身のものも含め隊商を襲う行為を指す。

あるロシア籍タシュケント人は，かつて新疆からの帰路，カザフに襲われた経験があることを述べた上で，「[再び] イリへ行こうとしていますが，キャラバンを守るために，50から60人のコサックを率いた［ロシア］官員を附けるよう命じて戴きたいのです」，と護衛を求める請願を行っている(54)。

護衛という手段以外に，政治的な関係を背景にして，カザフに略奪をしないようロシア当局が要請を行うこともあった。1813年にセミパラチンスクから清朝領のアクスに行ったロシア官員ブベノフが報告する所では，新疆に向かう途上で，カザフのスルタン，ビイ，長老たちに対して，知事からの「貿易に携わる商人に略奪や迫害を行わないように」という命令を伝え，さらに「少しでも愚かな行為があった場合には，ロシアの法にしたがい厳正に」対応することになる，と伝えた。これに，カザフ大ジュズのアディル=スルタンが応えて，ブベノフに自らのトレングト（家人）を同行させたという(55)。オムスク州長官を務めたブロネフスキーは，ロシアの方針を次のように概観している。すなわち，「アジア貿易に配慮すれば，ロシア政府は，中ジュズのスルタンたちを自分の側に引き付けることに最大の努力を払わざるを得ない」と述べた上で，有力なスルタンたちの名を挙げて，「隊商は，彼らに守護 *zashchita* されて，ブハラ，タシュケント，コーカンド，そして清朝の都市であるイリとタルバガタイへ移動する」ことを指摘している［Bronevskii 1830: 233］。つまり，ロシアに従っているスルタンが隊商を護ることを期待するものであり，第Ⅰ章に見たロシアに

(54) 1817年，ロシア籍タシュケント人長老から知事グラゼナプへの請願［GAOmO: f. 6, op.1, d.18, l.44］。

(55) 1814年，通訳官ブベノフからグラゼナプへの報告［GAOmO: f.6, op.1, d.19a, l. 6］。

よる旅券も，このような期待に基づいて発行されていたと考えられる。ロシアの商人が仲介を求めた一因として，カザフの仲介がもたらす，草原における隊商の安全を保障するという側面を確認できる。

ロシア帝国の支配がカザフ草原東部に展開される契機となった1822年以降は，カザフ側から積極的に隊商を保護する姿勢を見せることもあった。中ジュズのカザフのスルタンらは，

> 「カザフの牧地を通ってロシアからカシュガルやコーカンド国へ行く商人たちを保護するように *esän-sav ötkäzsünlär*，…［中略］…迫害を与えないように *zorlïq va zombulïq qïlmasunlar*」とあなた様は手紙にお書きになりました[56]。

と述べて，総督からの書簡の内容を確認した上で，ロシアに従う者として，「我々は，我々の下にいるナイマン［中ジュズの一部族］のカザフ総員とともに，いかなる圧迫も行いません。またいかなる時も通行税 *alïm* をこの商人らから集めません」と，隊商を襲わないことを約束した。前後して，大ジュズのスルタンであるスユクと総督との間にも同様のやり取りが交わされており[57]，カザフ草原においてロシアの影響力が強まるにつれて，スルタンの協力を得ることが常態化していったと考えることができる。

略奪の被害について，1835年に非ロシア籍ムスリム商人が申し立てた所によれば，セミパラチンスクからイリやタルバガタイに赴くにあたって，以前はロシアによる保護のために安全を享受していたが，今や略奪は絶え間なく行われるようになり，貿易の停滞に大きな影響を与えていたという。とりわけ，ロシアの官署である「管区庁からは離れた清朝のカルンの内側で遊牧し，自分たちをどちらの帝国にも属していないとみなし我が儘に振舞うスルタンたち[58]」から，大きな被害を被っていることを訴えていた。また，1822年の「シベリア=キルギズに関する規約」を楯に取り，ただ牧地を通過するだけの非ロシア籍ア

---

(56) 1825年，シャンカイ=スルタンらから西シベリア総督カプツェヴィチ宛て書簡（テュルク語）［VPR14: 289-290］。

(57) 1825年，スユク=スルタンからカプツェヴィチへの書簡［VPR14: 253］。

(58) クゼイ，セミズナイマン，トゥマ，ムルン，バイジギトの各支族のスルタンたちが名指しされた。

ジア商人からも多くのスルタンが「通行税 *alym*」を徴収していることにも不満が寄せられた[59]。彼らタシュケント，ブハラ人商人の認識に基づけば，やはりロシア＝清朝間の貿易にとって最大の障害はカザフの略奪であり，この問題の解決は，ロシアのカザフ草原に関わる政策の重大な関心事となっていたと考えねばならない。

カザフの清朝との貿易について，公式の取引が1850年代まで続いていたことは，これまでに指摘されている。しかし，カザフが中継するロシア＝清朝間の貿易，さらには，カザフの仲介による取引や，統計に残っていない私的な取引も加えて，商品の動きは多様であったことがここでは結論づけられる。また中継と仲介に加えて，略奪や通行税――ただし一部では隊商を保護することも余儀なくされた――という負の意味でも，カザフがこの地域の貿易に大きく関与していたことが，本章の考察から明らかになる。

Ⅲ．貿易構造の変化とロシアによるカザフ草原の併合

1．コーカンド系商人の時代

すでに名の挙がったコーカンド系商人についてここで簡潔に説明しておこう。遡れば16～18世紀にはブハラ商人がシベリアと中央アジアを結んでいたが［Ziiaev 1983: 147］，18世紀後半からコーカンド系商人（コーカンド市を始めとするフェルガナ地方出身者，タシュケント出身者も含む）も台頭するようになっていた。このことには，同時期のコーカンド政権の台頭も影響を及ぼしている。

彼らは，ジューンガル時代は東トルキスタンとの間を自由に往来し[60]，イルティシュ川沿岸諸都市との取引にも携わっていた［Ziiaev 1983: 148］。また，ジューンガル滅亡後も新疆と西シベリアをつなぐ役割を持っており，カザフの仲介と対照することができる。たとえば，18世紀後半のセミパラチンスクには，

---

(59) 1835年，セミパラチンスク税関長からシベリア税関区長官宛て［TsGARK: f.806, op.1, d.74, ll.33-36ob.］。牧地に滞在しカザフと商取引を行う商人からのみ通行税が徴収できることを規約は定めていた。

(60) 1830年，外務省から在北京正教伝道団長宛て訓令［VPR16: 462］。

ブハラ人，カシュガル人に加えて，タシュケント人が訪れ，さまざまな絹製品や茶，大黄，キタイカ（南京木綿），元宝などをもたらしていた［Andreev 1998: 87］。

1811年のコーカンド=ハン国によるタシュケント征服の結果，コーカンド=ハン国は，それまでブハラ経由であったオレンブルグ，シベリアへの道を確保し，貿易発展の重要な契機となった。その後の新疆におけるコーカンド系商人の活動については，佐口透の研究に詳しい[61]。

カシュガル=ホージャ家のジャハーンギールらによる清朝に対する反乱（1826-28年）は，コーカンド=ハン国の支援を受けていた。そのため，新疆の各都市（とりわけ南路）に居住していたコーカンド系商人は，清朝の規制により追放や貿易禁止の処分を受け，結果としてその経済活動は大きな打撃を受けた[62]。イリの場合は，嘉慶24～25年，すなわち1820年前後から「アンディジャン人」が居住するようになり，1829年には1,466名を数えたが，彼らはみな追放されている[63]。そのことは，ロシア史料にも反映され，反乱前後の貿易の混乱とコーカンド系商人らのロシア領への依存が報告されたのだった[64]。

その後の新疆北部における状況を確認しておこう。イリからコーカンド系商人らを追放した清朝は，以後貿易のために来るアンディジャン人の「逗留は一名たりとも許さない」方針を持っていた［回疆剿擒逆匪方略 巻78：3］。ロシア側の記録（1832年）には，イリ，タルバガタイに入ることは，ロシア商人には可

---

61 ［佐口1963］。コーカンドと清朝の貿易については［Newby 2005］も参照すべきである。

62 ［佐口1963：376］。数千人以上が追放されたことについて，道光10年12月19日，伊犂将軍玉麟ら奏［外交史料道光朝 巻4：16-17］。

63 道光９年２月１日，伊犂将軍徳英阿ら奏［回疆剿擒逆匪方略 巻78：2-3］（［佐口1963：378］も同箇所に言及）。

64 1827年，対外貿易部からシベリア税関区長官へ［TsGARK: f.806, op.1, d.1, l.5］。「清朝人と中央アジア人との戦いによって，アジア人は自分たちの商品について，以前よりもロシア国境 *predel* を頼るようになった」と記している。また同年の西シベリア総督から外相宛ての報告（［Valikhanov 1985: 322］所載）は，コーカンド系商人がペトロパヴロフスクに来ることに対し，ロシア当局が注意を払っていたことを示す。

能だが，「タシュケント人にはかたく禁じられている」とある[65]。またこの2都市に「アジア風の服装」で入ったロシア商人の報告によると，清朝人が，ロシア人に対して，他のムスリムに対するよりも良い待遇を見せたという[66]。南部でコーカンド=ハン国の求めにしたがって設置された「呼岱達（フダイダ）」職[67]も北部においては見られず，コーカンド系商人の勢力はホージャたちの反乱以後，より厳しく清朝の統制を受けていた。それは結果として，ロシア籍ムスリム商人の台頭，さらにはロシア人自らの新疆への進出につながったのである。

2．ロシア支配の強化とカザフ草原の混乱

次に，このような貿易の担い手の推移を，政治的な変動の中に位置づける必要がある。筆者がすでに示したように，露清両国のカザフ草原についての対応は明確に異なっていた。清朝にとって，カザフはあくまで辺境の緩衝的な存在に過ぎず，カザフとロシア，カザフとコーカンドの関係にも原則として不干渉の態度を取っていた。とくに1830年代以降，かつて想定していた境界線ではなく，カルンを基点とする防衛線の維持に努める姿勢を清朝は強めていった［小沼2001］。対するロシア帝国は，清朝との貿易も視野に入れながら，1833年頃までに中ジュズの遊牧地であったアヤグズ，コクペクトゥに管区を設け，かつて清朝領とみなされていた空間にその領土を広げることになった。もちろん清朝側はこれに反発したが，ロシアは撤兵することを容れなかったのである［野田2008：244-246］。

この領域は清朝側ではタルバガタイの管轄であった。より南方の大ジュズの遊牧地はイリの管轄下にあったが，ここでは，ロシアはもう少し慎重な態度を保っていたようである。前述シュビン率いるロシア部隊は，1825年に大ジュズの牧地に入った。彼らが残した建造物についての露清交渉では，ジューンガル

---

(65) 1832年，ブハラ人から駐アクモラのロシア部隊への報告［KROII: 261］。

(66) 1832年，財相宛て報告［TsGARK: f.806, op.1, d.48, ll.93-93ob.］。

(67) ［濱田2008：97］の整理も参照。漢語史料では「商頭」とも記され，ロシア史料ではアクサカル（長老）と呼ばれた。外来の商人を統括するこの役職はカシュガルなどに置かれていたが，ロシア側のイルティシュ川沿岸諸都市のコーカンド人コミュニティーにおけるアクサカル職と対比すべきである［Noda 2009］。

平定以来，バルハシ湖までを自領域とみなしていた清朝が頑強に撤去を求め，ロシアもそれに従っていた［野田2008：242］。のち31年にスユク=スルタンがロシアの管区開設を求めたことにより，大ジュズの帰属をめぐる問題が再び浮上する。この時，25年の交渉時の清側の「強い不満」を想起したために[68]，清朝との貿易関係への支障――キャフタ貿易停止――が危惧され[69]，外相ネッセルローデはイリ方面における清朝に対する十分な配慮を指示していた[70]。このような配慮が後に見られなくなったことは，40年代後半の新疆における貿易をめぐる露清交渉が示すとおりである［野田2008：251］。

並行してロシアはカザフの貿易への関与に干渉を加えつつあった。先に述べたように，隊商保護を半ば強制的にスルタンらに求めたほか，カザフの移動を制限しようと努め［Kasymbaev 1996: 65］，結果として，カザフによる隊商略奪は止むようになった［Kasymbaev 1990: 32］。

北からのロシア管区展開に加えて，南のコーカンド=ハン国の攻勢にさらされたこともカザフの貿易への関与に影響を与えたことは疑いない。さらに，1837～47年のケネサルによる反乱はとくに中ジュズ，大ジュズのカザフの牧地に大きな混乱をもたらした。反乱が，「西シベリアと中央アジアとの間の貿易活動に，ひどく影響を与えた」という指摘もある［Balkashin 1999: 25］。45年にトロイツクからタルバガタイへ赴いたタタール商人も，ケネサルの反乱軍が隊商を略奪するので，1844年までは新疆へ赴くことを考えなかったと証言する［Abubakirov: 372］。

カザフの清朝との取引について言えば，新疆北部へ入ったリュビーモフは，依然としてカザフが家畜を売っていることを記録する［Liubimov2: 303］。19世紀になると，カザフがどれだけ新疆に家畜をもたらしたかを示す情報はほとんど知られていないが，代価となる回布の量は99,000余疋と定まっており，少な

---

(68) 1831年，オムスク州長官から西シベリア総督ヴェリヤミノフ宛て［TsGARK: f.338, op.1, d.543, l.4］。

(69) 1831年，ヴェリヤミノフから外相宛て報告が，「清朝政府は，カラタル川，アクス川などが自領内を流れるとみなしている」ことを確認した上で，清朝との関係悪化が貿易に及ぼす影響を懸念した［GAOmO: f.3, op.12, d.17677, ll.20, 22ob.］。

(70) 1833年，西シベリア総督宛て訓令［GAOmO: f.3, op.12, d.17677, l.78ob.］。

くとも1849年までその量はおおむね維持されたようである［林；王1991：445-450］。実際にカザフが取引を行っていた額は，すでに示したような非公式のものを考慮すれば，より大きなものであったと考えられる。これにコーカンド系商人による中継や仲介が加わり，さらに，1845年には，すでにロシア籍商人が新疆で貿易を行うことも珍しくなくなっていた。このときタルバガタイのアンバン（大臣）は，リュビーモフ一行がロシアの臣民であることを承知した上で，新疆に入ることを望むならば，「取引が許されているのは，アンディジャン人に対してであってロシア人にではないから，［ロシア商人を］アジアの装いで来させるように」と述べ，形式さえ整えば受け入れる姿勢を示唆しさえしたことが，リュビーモフの手稿から分かるのである［Liubimov2: 289］。

同時期にタルバガタイに入ったロシア籍タタール商人は，清のカルンを通過する際に，「清朝皇帝の同盟者であるロシア皇帝の臣民」であることを堂々と告げ，当地の參贊大臣との面会時も同様の態度を示した。その結果として，友好国であるロシアから来たという理由で貿易を許されたと述べている［Abubakirov: 382］。つまり，かつて清朝が頑なに守っていた原則は，このときにはもはや形骸化していたのである。

ロシア商人の台頭の理由を考えてみると，清朝の境界周辺で遊牧をするカザフまでもが，ロシアに帰属し始めていたことが挙げられる。以前は略奪者として名の挙がっていた中ジュズのバイジギト支族について，２人の有力なスルタン，サベクとドランバイ(71)が「ロシア臣籍に入る素振りを見せて」おり，新疆への路の安全を保証することはさほど難しくなくなっている，とリュビーモフは観察している［Liubimov1: 448］。この事実も，ロシアにとっての新疆での貿易の可能性を高めたにちがいない。

3．ロシアの企図

清朝との貿易を管轄していたシベリア税関区長官は，「今は遊牧民を含むアジア人が直接行っている清朝との取引は，次第にロシア人の手に移るだろう」

(71)　ドランバイによるロシアへの使者派遣については［野田2008：249］。

と1832年に述べており，このような展望が，すでに西シベリアの当局の中で形成されていたことがわかる[72]。前後して，「清朝との貿易の基礎のために，セミレチエに近いアヤグズ川沿岸に貿易拠点を設けること」はきわめて有益であるという見解を西シベリア総督は示しており，ロシアの管区開設の動きと新疆における清朝との貿易を関連付けていたことも明らかである[73]。ロシア中央においては，1842年に，西シベリア＝新疆間の貿易の可能性について本格的に議論が行われた［シチェグロフ1943：631］。そのような状況下で，かつて1840年に伝道団附き警務官として北京に派遣されていたリュビーモフが新疆への潜行を命ぜられたのであった。

ロシア商業の新疆における展開について，リュビーモフの報告書は，茶のロシアへの輸入が1839年から本格的になったこと，45年にはロシア国籍者の隊商がすでに定期的になっていたことを伝えている［Liubimov1: 314, 326］。なお，新疆で取引された茶は福建産で，リュビーモフのインフォーマントもそうであったように，おもに山西商人によってもたらされていた［Liubimov2: 291, 294］。ロシア商人の常在化と同時に，これまで私的な取引が許されていなかった清朝の内地商人も新疆での取引を許されるようになり，まさに，ロシアと清朝の新疆における直接取引の条件が整ったと言える。リュビーモフが報告するように，ロシアの積極的な方針の裏には，カシュガルにおける英国商品の存在や［Liubimov1: 343］，中央アジア市場におけるイギリスの影[74]も作用し，南京条約締結後のイギリスの影響力をロシアが意識していたことは言うまでもない[75]。

このような西シベリア＝新疆間の直接取引の背景として，さらに，ロシアの大ジュズへの進出も併せて論じることができる。1847年のケネサル反乱の収束と前後して，カザフ大ジュズのスルタンたちはロシア政府に請願書を送り，ロ

---

(72) 財相宛て報告［TsGARK: f.806, op.1, d.48, l.94ob.］。

(73) 1830年，西シベリア総局からシベリア税関区長官宛て［TsGARK: f.806, op.1, d.13, l.210］。

(74) 1842年ころからイギリス商品が，イランやカンダハル経由でブハラに入っていたことについては［Nebol'sin 1855:216］。

(75) 1846年，シベリア税関区長から対外貿易部長宛て［TsGARK: f.806, op.1, d.157, l.11ob.］。

シア臣籍に入ることを誓った。こうしてロシアは，セミレチエ（バルハシ水系）に進出し，48年には大ジュズ監督官の職を設けた。その結果，セミレチエを自領とみなしていた清朝との間に再び摩擦が生じるのは必然であった。1849～50年にかけての露清間の交渉については拙稿［野田2008］を参照されたいが，現地での境界をめぐる交渉と並行して，中央で新疆における開市に関わる両帝国の議論が進んでいたことに注目したい。

1848年初頭のネッセルローデから大ジュズ監督官への訓令が明示するように，この地域でも「［清朝との］貿易」が課題であり［Rozhkova 1949: 335］，大ジュズを帝国に取り込むことは，ロシア政府の新疆における貿易の希求と無縁ではなかった。加えてロシア政府が積極的な交渉を開始する契機となったのがリュビーモフの報告書であった[76]。1847年以降３度にわたり，正教伝道団を通じて元老院名義の文書を理藩院に届け，ロシアは，イリ，タルバガタイ，カシュガルという新疆３都市での貿易を求めるに至ったのである。

交渉の詳細な検討は別稿に譲るが，清朝政府は拒否の態度を示しながらも，最後には上諭において「ロシアが［新疆で］内密に貿易をしていることは，すでに耳目を覆いがたい」という現状を認めた上で，これを追認する見解を出し，現地での調査を命じた[77]。これに応えた上奏によれば，カシュガルにおける取引には問題が多かった。その理由として，インド方面から迫るイギリスも貿易を希望する可能性，および正教徒であるロシア人とムスリムとの摩擦の懸念があった[78]。これにより，理藩院はカシュガルを除く２ヵ所での貿易を認め[79]，従来ロシア人の往来が認められていなかったイリへロシア使節が来て，条文の交渉を行うよう提議したのだった［Antonov 1982: 159］。

こうしてロシア商人――ロシア人か，タタール人などのムスリムかは問わず

---

(76) 1846年５月にネッセルローデに提出された［Antonov 1982: 153］。またリュビーモフは北京伝道団長ポリカルプと書簡を交わし，情報を収集していた［Ipatova 1993］。

(77) 伊犂将軍薩迎阿（サインガ）および參贊大臣奕山（イシャン）宛て上諭（密寄，道光29年12月25日）［嘉慶道光両朝上諭檔：601］。同様の内容の聖訓は［羽田1961］も引用している。

(78) 道光30年３月21日（1850年５月），サインガらの奏［籌辦夷務始末 巻1：2-3，5-6］。

(79) ４月３日，理藩院議覆の附件［籌辦夷務始末 巻1：7-8］。

――の新疆における直接取引が開始される。清朝国内の商人の動向も含めて，この地域における貿易構造は一変することになる。このいわゆる「イリ通商条約」（漢語で「伊犂塔爾巴哈台通商章程」）は露暦1851年７月25日（咸豊元年７月10日）に調印された[80]。条約の要点は，２都市の開放に加え，ロシアの領事を置くとともに「貿易亭」すなわち商館（faktoriia[81]）を設け，無関税で取引を行うことにあった［吉田1974：217-218］。条約締結後は，西シベリア当局が発給する旅券によりロシア商人の清朝領内への通行が可能になり[82]，新疆北部経済へのロシアの関心は領事館および商館を拠点として保持されることになった。またこの条約は，その後両国間で行われる一連の境界画定交渉の起点にもなっていた。

条約の締結過程を考察した羽田明は，「キャフタ条約などの延長であることには変りはない」と見ており［羽田1961：737］，清朝側での認識としてはこれに同意できる。ただし，その後ムスリム反乱による混乱を経てイリ事件にいたるまでのロシアの新疆への視線を考えれば，条約の内容に反映されるロシアの意図について，またそれを受け容れることになった清朝の外交・辺境統治政策について，露清双方の史料の比較とさらなる検討が必要になると考えている。

お　わ　り　に

本稿では，露清の貿易に関わる政策を整理した上で，18世紀後半以降，本来禁止されていたはずの，露清間の隊商往来を可能にしたシステムを解明した。清朝と公式な関係を持つようになったカザフ，コーカンドの人間は新疆における貿易を許され，それゆえに，西シベリア＝新疆間の仲介を行うことができた。また彼ら自身も商品を中継する役割を持っていた。18世紀後半から1820年代に

---

(80)　［中俄：15］。イリで行われた条約交渉の状況は，咸豊元年１月23日，イシャンらの奏を参照［中俄：12-14］。

(81)　1843年のセミパラチンスク税関長から西シベリア総督への意見書に，タルバガタイに商館を設けることが貿易の発展につながるという認識がすでにある［TsGARK: f.806, op.1, d.157, ll.13-14ob.］。

(82)　1860年の例として［TsGARK: f.3, op.1, d. 372, l.14］。

かけてのカザフの役割に注目すると，スルタンらの仲介に加えて，略奪や通行税の形で貿易に関与していたことが明らかになる。新疆への隊商派遣を勧めていた西シベリアの商人は，新疆への入境とカザフ草原通行の安全のために，カザフの仲介を必要としていたのだった。

19世紀前半になり，コーカンド=ハン国の勢いは増し，コーカンド系商人は，新疆における反乱にも乗じて，中央アジア，西シベリア，新疆南部を結ぶ貿易活動を行い得た。一方で，新疆北部において彼らは勢力を失い，代わってロシア商人が直接の取引に乗り出そうとしていた。それには，ロシア帝国がカザフのスルタンらを臣民として取り込むことが大きな意味を持っていた。この動きは，1851年のイリ通商条約締結として結実し，イリ，タルバガタイでのロシア商人の取引が最終的に認められることとなった。

このような西シベリア＝新疆間貿易における構造の変化は，政治的な変動と連動しており，貿易に対するカザフの影響力の低下も，清朝との直接取引を狙うロシアの進出，コーカンドの勢力拡大，カザフ草原の混乱という諸要素が絡み合った結果であった。また露清の中央アジアに対する政策の差異は際立っており，ロシア側が清朝との貿易を常に視野に入れながらカザフ草原併合を進めていたことは，本稿で提示した文書史料も鮮明に物語っているだろう。

参考文献と略号

未公刊史料

GAOmO: ロシア連邦国立オムスク州文書館 Государственный архив Омской области РФ, Омск.

TsGARK: カザフスタン共和国国立中央文書館 Центральный государственный архив Республики Казахстан, Алматы.

満文録副：中国第一歴史檔案館蔵，軍機処全宗満文録副奏摺

その他の史料・参考文献

小沼2001：小沼孝博「19世紀前半「西北辺疆」における清朝の領域とその収縮」『内陸アジア史研究』16号，61-76頁。

佐口1963：佐口透『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館。

佐口1966：佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館。

シチェグロフ1943：シチェグロフ（吉村柳里訳）『シベリア年代史』日本公論社（原著は1883年刊）

野田2005：野田仁「露清の狭間のカザフ・ハーン国――スルタンと清朝の関係を中心に――」『東洋学報』87-2，029-059頁。
野田2007：野田仁「18世紀中央アジアにおける露清関係――ジューンガル政権崩壊からカザフ，アルタイ諸族の帰属問題へ――」『史学雑誌』116-9号，1-37頁。
野田2008：「第７章：露清関係とカザフ草原――帝国支配と外交の中の地域認識――」宇山智彦編『地域認識論：多民族空間の構造と表象』（『講座スラブ・ユーラシア学』第２巻）講談社，231-257頁。
羽田1961：羽田明「伊犂通商条約の締結とその意義」『和田博士古稀記念東洋史論叢』講談社，729-739頁。
濱田2008：濱田正美「北京第一歴史档案館所蔵コーカンド関係文書９種［含チャガタイ語文］」『西南アジア研究』68，82-111頁。
森永2004：森永貴子「イルクーツク商人とキャフタ貿易――1792～1830年――」『スラブ・ユーラシア学の構築』研究報告集⑶，北海道大学スラブ研究センター，1-36頁。
吉田1974：吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社。
宝音朝克図2005：宝音朝克図『清代北部辺疆卡倫研究』 北京：中国人民大学出版社。
籌辦夷務始末：『籌辦夷務始末咸豊朝』同治６（1866）年（北京：中華書局，第一冊，1979年）。
俄文：国家清史編纂委員会編訳組，『歴史研究』編輯部合編『故宮俄文史料』北京，国家清史編纂委員会，2005年（初版1964年）。
高宗：『大清高宗純皇帝實録』
回疆剿擒逆匪方略：『欽定平定回疆剿擒逆匪方略』曹振鏞等纂，道光10（1830）年（台北：文海出版社，８冊）。
嘉慶道光両朝上諭檔：中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光両朝上諭檔』第54冊，桂林：広西師範大学出版社，2000年。
厲1993：厲声『新疆対蘇（俄）貿易史：1600-1990』烏魯木斉：新疆人民出版社。
林；王1991：林永匡；王熹『清代西北民族貿易史』北京：中央民族学院出版社。
米2005：米鎮波『清代西北辺境地区中俄貿易：従道光朝到宣統朝』天津：天津社会科学院出版社。
外交史料道光朝：『清代外交史料』（故宮博物院編）北平，道光朝巻，1932-1933年（台北：成文出版社，1968年）。
伊江彙覧：格琫額『伊江彙覧』（中国社会科学院中国辺疆史地研究中心『新疆稀見史料彙輯』北京：全国図書館文献縮微複製中心，1990年，1-88頁）。
伊江集載：『伊江集載』（『新疆稀見史料彙輯』89-124頁）。
中俄：中国第一歴史檔案館編『清代中俄関係檔案史料選編』第三編上冊，北京：中華書局，1981年。
中蘇貿易史資料：孟憲章『中蘇貿易史資料』北京：中国対外経済貿易出版社，1991年。

Abubakirov: Рассказ троицкого 2-й гильдии купца, Абдул-Бали Абдул-Вагапова Абу-Бакирова, о путешествии его с товарами из Троицка в Чугучак, и о прочем// *Географические известия,* Вып. 2, СПб, 1850, с.371-410.

Aldabek 2001: Алдабек, Н. А., *Россия и Китай: Торгово-экономические связи в Центрально-азиатском регионе XVII -XIX вв.,* Алматы.

Andreev 1998: Андреев, И. Г., *Описание Средней орды киргиз-кайсаков,* Алматы.（初版1785年）

Antonov 1982: Антонов, Н. К., Истории заключения русско-китайского договора 1851 г. в Кульдже// *Документы опровергают: против фальсификации истории русско-китайских отношений,* Москва: Мысль, с.148-164.

Apollova 1976: Аполлова, Н. Г., *Хозяйственное освоение прииртышья в конце XVI первой половине XIX в.,* Москва.

Balkashin 1999: Балкашин, Н. Торговое движение между Западной Сибирью, Среднею Азиею и Китайскими владениями// *Сибирь и Центральная Азия: проблемы региональных связей,* Томск: Томский гос. унив., вып.1, с.21-45.（初出1881年）

DiCosmo 2003: Di Cosmo, N., "Kirghiz Nomads on the Qing Frontier: Tribute, Trade, or Gift-Exchange?" Di Cosmo, N.; Wyatt, Don J. eds., *Political Frontiers, Ethnic Boundaries, and Human Geographies in Chinese History,* London: Routledge Curzon, pp.351-372.

Fletcher 1978: Fletcher, J., "Sino-Russian relations, 1800-62", J. K. Fairbank ed., *The Cambridge History of China*, vol.10, part1, Cambridge, pp.318-50.

Frank 2003: Allen Frank "Islamic Transformation on the Kazakh Steppe, 1742-1917: Toward an Islamic History of Kazakhstan under Russian Rule", Hayashi Tadayuki ed., *The Construction and Deconstruction of National Histories in Slavic Eurasia,* Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido univ., pp.261-290.

Ianushkevich 2006: Янушкевич, А., *Дневники и письма из путешествия по казахским степям,* Павлодар: ЭКО.（初版1861年）

Ipatova 1993: Ипатова, А. С. Пекинские письма П. Тугаринова к Н. И. Любимову (40-е годы *XIX* в)// *И не распалась связь времен…,* Москва: Восточная литература, с.164-185.

Kasymbaev 1990: Касымбаев, Ж. К., *Города восточного Казахстана в 1861-1917 гг.,* Алма-Ата.

Kasymbaev 1996: Касымбаев, Ж. К., *Казахстан-Китай: караванная торговля в XIX-начале XX вв.,* Алматы.

Khokhlov 1982: Хохлов, А. Н. Кяхтинская торговля и ее место в политике России и Китая (20-е годы 18 в.-51-е годы 19 в.)// *Документы опровергают…,*

c.99-147.

Konshin 1905: Коншин, Н., Материалы для истории Степного Края. VI// *Записки Семипалатинского подотдела Западно-сибирского отдела ИРГО,* вып. 2.

Korsak 1857: Корсак, А., *Историко-статистическое обозрение торговых сношений России с Китаем*, Казань.（初版1856年）

Krasovskii 1868: Красовский, М., *Область сибирских киргизов* (Материалы для географии и статистики России, собранные офицерами генерального штаба. т.16), ч.2, СПб.

KROII: *Казахско-русские отношения в XVIII-XIX веках (1991-1867 годы): сборник документов и материалов*, Алма-Ата, 1964.

Kuznetsov 1973: Кузнецов, В. С., *Экономическая политика цинского правительЭства в Синьцзяне в первой половине XIX века,* Москва.

Liubimov 1: Веселовский, Н., *Поездка Н. И. Любимова в Чугучак и Кульджу в 1845 году под видом купца Хорошева,* СПб., 1909.

Liubimov 2: Путевой журнал поездки на Восток Н. И. Любимова. 1841 года// Валиханов, Ч. Ч., *Собрание сочинений,* т.4, Алма-Ата, 1985, с.274-326.

Meiendorf 1975: Мейендорф, Е. К., *Путешествие из Оренбурга в Бухару,* Москва.（初版1820年）

Nebol'sin 1855: Небольсин, П., Очерки торговли России со Средней Азией// *Записки Императорского Русского географического общества,* кн.10.

Newby 2005: Newby, L. J., *The Empire and the Khanate: a political history of Qing relations with Khoqand c. 1760-1860,* Leiden; Boston: Brill.

Noda 2009: Noda Jin, "Russo-Chinese Trade through Central Asia: Regulations and Reality", *Asiatic Russia: Imperial Policy from the Muslim and Eastern Perspectives*（北海道大学スラブ研究センター冬季シンポジウム報告集として刊行予定）

RKOXIX: *Русско-китайские отношения в XIX веке: материалы и документы,* Москва, т.1, 1995.

Rozhkova 1949: Рожкова, М. К., *Экономическая политика царского правительства на Среднем Востоке во второй четверти XIX века и русская буржуазия,* Москва.

Valikhanov 1985: Валиханов, Ч. Ч., *Собрание сочинений.* т.2. Алма-Ата.

VPR (5-6, 13-14, 16): *Внешняя политика России XIX и начала XX века: документы Российского Министерства иностранных дел,* Москва, 1963-1995, т.5-6, 13-14, 16.

Zhivopisnoe: *Живописное путешествие по Азии. составленное на французском языке под руководством Эйрие и украшенное гравюрами.* (Перевод Е. Корша), т. 2, Москва: тип. Николая Степанова, 1839.

Zibbershtein 1936: Вяткин, М. П., Путевые записки лекаря Зибберштейна// *Исторический архив,* №1, с.223-258.

Ziiaev 1968: Зияев, Х., *Узбеки в Сибири XVII-XIX вв.,* Ташкент.

Ziiaev 1983: Зияев, Х. З., *Экономические связи Средней Азии с Сибирью в XVI-XIX вв.,* Ташкент.

付記　本稿は，平成19～20年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

take comprehensive control of regional military affairs, and the problem of ritual etiquette to be performed between civilian and military officials was deeply related to the entire range of relationships between civilian and military officials in the provinces. In early Qing times the actual power of military officials such as Regional Commanders 總兵官 grew, but suppressing anti-Qing forces effectively using the military power led by these kinds of military officials and at the same time suppressing their high-handed behavior by placing them under control of the center became important tasks for the Qing dynasty. The process of settling system of *Wenwu xiangjianyi zhu* meant a reorganization of the entire sphere of regional officialdom and this can be seen as reflecting an attempt by the Qing dynasty to stabilize the situation through this visualization of it through ritual etiquette.

THE RUSSO-QING TRADE IN CENTRAL ASIA AND THE KAZAKH STEPPE

NODA Jin

When the power of the Junghars declined in the mid 18th century, the possibility of building trade ties between Western Siberia on the Russian side and Xinjiang on the Qing side was heightened. The Kazakhs were particularly involved in the international commerce in Ili and Tarbagatai in northern Xinjiang. In addition to playing a role in the transit trade between Qing and Russia, they served as intermediaries when trading parties enter Xinjiang from Western Siberia, and they were also involved in the trade as plunderers when those trading parties had to cross the Kazakh steppe.

In background to the establishment of this trade structure was the difference between the Russian and Qing policies toward Central Asia. Although in reality Kazakhs and Khoqand merchants were intermediaries in the flow of goods and people between Western Siberia and Xinjiang, the Qing dynasty would not officially recognize the entry of Russian merchants or products. On the other hand, Russia dispatched trading parties from the first and assigned Cossack battalions to defend against Kazakh raids, and thus Russia's positive stance was clear.

The aggressive moves made by the Russian empire were closely linked to the development of its political rule over the Kazakh steppe. Russia began to establish administrative districts in the nomadic pasturelands known as the Middle Zhuz in 1822, and the nomadic Kazakhs were thereby incorporated under Russian rule,

and they lost their role in the trade. In the northern part of Xinjiang, the influence of Khoqand merchants who replaced the Kazakhs in the role as intermediaries in the transit trade was limited, and in the decade of the 1840s the entry of merchants of Russian nationality (primarily Muslims) into Xinjiang had become taken for granted, as is indicated in the report of Liubimov of the Russian Foreign Ministry.

When Russia advanced further to the south into the territory of the Senior Zhuz, the Qing dynasty, which at first pressed its claim to the Kazakh steppe, was forced to tacitly consent to Russian rule. In regard to the trade problem about which negotiations were held simultaneously, the business conducted by Russian merchants in northern Xinjiang was officially recognized due to the Treaty of Kulja of 1851, and in accord with political change, the trade in this region took on a completely different form than that had existed previously.